

赤川次郎

探偵物語



KADOKAWA NOVELS

ギャング騒動に巻かれたヨレ、ヨレ探偵と
美人女子大生。殺しと恋の物語。

薬師丸ひろ子
復帰第1作

書下し・ユーモアミステリー 角川映画化

KADOKAWA NOVELS

探偵物語

赤川次郎



カドカワノベルズ

昭和五十七年十一月二十五日初版発行
昭和五十八年二月二十八日七版発行

著者 赤川次郎 あかがわじろう

発行者 角川春樹

探偵物語 たんでいものがたり

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 大谷製本株式会社

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目三番 振替東京三〇一五〇八
電話東京三六二七二二大代表 千一〇二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0293-771004-0946(0)

プロローグ

ふと眠気を誘われるような、春の宵である。

そろそろ真夜中。——一人の、中年サラリーマン氏が、一杯機嫌、いささか足もとの覚束ない^{おぼつか}状態で家路を辿^{たど}っていた。

ついさっきまでは大声で歌など歌って——いや張り上げていたのだが、今は何となく口の中でムニャムニャとハミングするに止ま^{とど}まっている。

何しろ、この辺り、「高級住宅地」の上に「超」の字がつくほど、塀と門構えが黙々と続いているだけなので、自然、大声を上げるのがはばかられて来るのだ。——ここを通り抜けてマツチ箱の如き^{ごと}我が家へ帰る度に、このサラリーマン氏は、自分が少しトシを取ったような気がするのだった。

このサラリーマン氏、別に名はどうでもいい。この後登場する予定はないのだから。万一登場することになれば、そのときにご紹介しても差し支えあるまい。

「どうして同じ人間でこうも違うんだ？」

と、サラリーマン氏は、高い塀を見上げながら独り言を言った。

もちろん、そんなグチは何の役にも立たない。承知の上で、なお言うからグチなのかもしれない。

ともかく、この「お屋敷街」を早く通り過ぎちまおう、と足を早めたサラリーマン氏は、五、六歩進んで、足を止めた。

「あれ？」

と、首をかしげたのは、今しも、高い塀の一つによじ登らんとしている人影を見かけたからである。

もちろん、それは普通なら泥棒とか空巢とかのすることなのだが、今、サラリーマン氏の目に、街灯の明りに照らされて映っているのは、スカートからすんなり伸びた白い足。ということとは、塀によじ登らんと足をバタつかせているのは、女に他ならないのだった。それも、どう見ても若い女で——まあ娘といった方がピンと来る。

「よいしょ、よいしょ」

と、声をかけつつ、塀の上へ、足をかけようと必死で頑張っている。

ちょうど、塀の内側から、一本の木の枝が道へのびていて、その木へ取りついて中へ降りようというところらしい。

しかし、妙な光景である。あんな泥棒もあるまいが、といって、この家の人間なら、ちゃんと玄関から入ればいいではないか。

サラリーマン氏は、その塀の下へ行つて、ポカンと上を眺めていた。やっところ塀の上に上ったその娘は、ふと下へ目をやってサラリーマン氏に気が付くと、別にあわてる風でもなく、

「今晚は」

と、声をかけて来た。

「やあ」

と、サラリーマン氏は言った。「大変だね」

「ええ、まあね」

「どうして……門から入らないの？」

「意地悪なまま母がいて、入れてくれないの」

「ふーん」

「じゃ、おやすみなさい」

「おやすみ……」

サラリーマン氏は、また歩き出した。——金持だからって、みんなが楽しんでるわけじゃないんだ、と一人で納得して肯きながら、家へ向う足取りも多少早くなった。

一方、塀の上の娘は、笑いをかみ殺しながら、サラリーマン氏を見送っていたが、やがて、木の枝へと、そっと手をかけた。ヒョイと枝を分けて、庭を覗く。

ちょっと愛嬌のある顔である。いや、美人でないとも言えないが、美人という少しイメージに外れている。普通の状態でも、多少びっくりしているように見える大きな目。鼻筋が通って、そのくせ、口元は、いたずらっ子の面影を残していた。

木の下から、芝生が広がっていて、その向うに、どっしりとした大邸宅が、今はひっそりと暗く、眠りについている。

「よし……慎重に、慎重に……」

と、自分に言い聞かせながら、娘は塀から木の幹へとゆっくり体重を移した。

「キヤッ！」

ちょっとバランスを崩したのか、ふらつとよろけて、細い枝につかまると、メリメリッと音を立てて、枝は折れた。つまり、ここは重力の法則に従って、娘は落下したのである。

「あ——いた……いてえ！」

こういう邸宅の庭で吐くには、少々ふさわしくないセリフだったが、いやというほどお尻を打ったら、そんなことを気にしちやいられないのだ。

「ついてないなあ、もう……」

娘はブツブツ言いながら、やっとの思いで立ち上った。それから、先に塀越しに放り込んであったらしいバッグを拾い上げると、お尻をさすりながら、芝生を横切って行く。

テラスには、白いテーブルと椅子がいくつか並べられている。その間を抜けて、ガラス戸の前に来ると、

「さて……。開くかな」

と呟く。「どうせこのままじゃ、開きやしないんだから——」

手をかけて引いてみると、ガラッとも音をたてずに、戸が動いた。

「変だな。——長谷沼さん、鍵をかけ忘れたのかしら」

と、重いカーテンを寄せて、暗い室内へ……。

突然、明りが点いて、娘は飛び上った。

「——お帰りなさいませ」

きつちりと和服を着込んだ、五十歳前後の婦人が、頭を下げた。

「ああ、びっくりした」

と、新井直美は口を尖らして、「起きてたの？」

「年を取りますと、そう眠らなくてもよろしいのでございます」

「その内、いつまでも眠れるようになるわよ」

直美はバッグをソファの上に放り出した。

「お帰りは玄関からの方がお楽かと存じますが」

と、長谷沼君江は、勢い余って床に落ちた直美のバッグを拾い上げながら言った。

「少し太り気味だからやせたかったのよ」

と直美は言った。「疲れた。——お風呂に入るわ」

「お湯が張ってございます」

「その前に何か食べたい」

「いつでもお仕度ができております」

直美は、長谷沼君江をにらんで、

「たまには、『うっかりしておりました、申し訳ございません』って言うてみたら？」
「お嬢様のことなら、自分のことのように分っておりますので」

それはそうだ。何しろ、この長谷沼君江は直美が生れるずっと前から、この新井家で働いているのである。

「じゃ、お風呂を先にするわ」

と、直美は居間を出ながら言った。

「着替えは置いてありますので」

「あ、そう」

「パンツは花柄でよろしいですか？」

「何でもいいわよ！」

直美は真っ赤になりながら、言った。

新井直美、二十歳。——ちょっと幼くて、十八歳ぐらいにしか見えないが、都内の名門私立大の三年生である。

思い切りよく裸になると、大理石を貼った浴室へ入って、大きな浴槽に、エイッとばかり、飛び込んだ。頭まで潜って、ザバッと顔を出し、雨で濡れた犬みたいに、ブルブルッと頭を振る。

「あーあ」

ため息とも、欠伸ともつかぬ声を発して、ウーンと両手を伸ばす。まるで、天井を突き抜けて、夜空の星でもむしり取って来ようとするかのようにだった。

「——普通にお食べになりますか？」

直美がタオルのバスローブをはおって、ダイニングルームへ入って行くと、長谷沼君江が訊いた。
「食べて来たから、いいわ。お茶漬が何か食べたいわ」

「かしこまりました」

直美は、濡れた髪を、タオルで拭いながら、椅子に腰をかける。——広々とした、六人はゆったり座れるテーブル。

いつも、ここで直美一人が食事をするのだ。君江の手早さは、正に魔法であって、一体どこでどうやっているのか、と、直美は首をかしげる。

お茶漬が出て来るまでに、三分とはかからなかった。

「お父さんから、何か連絡は？」

直美は、熱いお茶をご飯に注ぎながら訊いた。

「夕方、お電話がございました。お嬢様のことを心配しておいでですよ」

「心配なら向うが帰って来りゃいいのよ」

「お仕事がございますから」

「アメリカまで通勤すりゃいいのに」

「無茶をおっしゃるものではございません」

「お父さんの方が無茶よ。私に、アメリカへ来いだなんで。——私があっちに行って、何かいいことでもあるって言うの？」

「親子は一緒に住むのが一番でございます」

「親子はね」

と直美は言った。

「——おかわりなさいますか」

「もういいわ。ここにお茶だけ入れて」

「かしこまりました」

直美は、空になった茶碗へ、お茶を注ぐ君江の、落ち着いた手つきを見ながら言った。

「長谷沼さんは何とも思わないの、あの人のことを」

「奥様のことですか？」

「奥様か」

直美は息をついて、テーブルに顎をのせた。

「お父さんの女房でも、私のお母さんじゃないわ」

長谷沼君江は、ちょっと笑顔を見せて、

「割合とナウくないんですね、お嬢様も」

と言った。

直美がキョトンとして、それから吹き出した。

「——そりゃ、私だって、お父さんに一生女っ気なしで過せとは言わないわ。でも、あんな——私と十歳ぐらいしか違わないのよ。お父さんの妻なら妻でいいわ、無理に母親になろうとしなきゃね」

「ともかく、お父様は一人っ子のお嬢様を、そばに置いておきたいんですわ。——もうお済みですか」

「うん、片付けていいわ。——だけどね、私はもう二十歳よ。五つや六つの子供なら分るけど……」

「親から見れば、子供は常に子供です」

「二十歳といえは、選挙権もあるし、お酒もタバコも——」

「もっと前から、飲んでらしたじゃありませんか」

ともかく、君江は直美のことを何でも承知しているのだ。不公平だわ、と直美は思った。

「それに——そう、二十歳になったんだから、親の承諾なしに結婚できるのよ、好きな相手と」

「それはそうです」

「そうか……」

直美は、初めて気が付いた様子で、「結婚しちゃえばアメリカに行かずに済むわね」と、肯いた。

「アメリカへお発ちになるまで、後五日しかございませんよ」

「五日もありや充分よ。フィーリングさえ合えば、一日だって……」

「お嬢様——」

と、君江の顔色が少し変った。

直美は声を上げて笑った。

「冗談、冗談！——いくら私でも、そんなことしませんよ。ああ、眠くなっちゃった」

と立ち上ると、「もう、休学届、出しちゃったから、大学行く気しないわね。といって、他に行く所もないし……。明日はお昼頃までに起きて来なかったら、起こしてちょうだい」

「かしこまりました」

直美はダイニングルームを出ようとして、振り向くと、

「私、ウェディングドレスとうちかけと、どっちが似合うと思う？」

と訊いた。「おやすみ」

「おやすみなさいませ」

長谷沼君江は、直美がポンポンと階段を一段おきに駆け上って行くのを、ドアの所で見送ってから、ちょっと笑って、キッチンの方へ歩いて行ったが……。

「まさか……」

と、ふっと真顔になって呟いた。

直美がベッドへ飛び上ったのか、二階から、ドスン、という音がかすかに聞こえて来た。君江は、ちょっと不安気に、天井を見上げて立っていた……。

「もう半月よ！ 半月にもなるのに、何一つつかめないってのはどういうこと！」
典型的なヒステリー症状だった。

「奥さん、探偵というのは、大変にデリケートな作業でございまして——」

と、社長の平本は、どうにも捉えどころのない、ウナギかドジョウのような笑顔を見せながら言った。「万が一、ご主人が尾行や監視に気づかれては、もうおしまいです。ですから、私どもとしましては、慎重の上にも慎重に——」

「慎重に料金をふんだくってるわけね？」

その夫人は、正に短剣の如く突き刺さりそうな言葉を、平本社長へ向って投げつける。「長引けば長引くほど、お宅は儲かるわけですものね」

ヒステリーは冷ややかな皮肉へと形を変えた。

「奥さん、私どもは決してそんな悪どい商売はいたしません。確かに、同業者の中には、そういう悪質な者がいるのも事実です。しかし、私どもは決してお客様の信頼を裏切るような真似は——」

「父がね、よく言ってたわ」

と、夫人は遮った。「しゃべりすぎる男は信用するなって」

平本は急いで口をつぐんだ。夫人は続けて、

「主人も口の巧い男なの。すっかりごまかされたわ、本当に」

夫人は、組んでいた足を戻した。スカートがフワリと持ち上って、一瞬、ピンクの下着が平本の目に飛び込んで来た。

「ともかく、主人の浮気の現場を押えた、動かぬ証拠を三日以内に届けてちょうだい」

と、夫人は立ち上りながら言った。「主人はあの女と、一日置きに会っているのよ。三日あれば充分でしょ」

「ですが、奥さん——」

「もし、三日たっても、何一つつかめないときは」

と、おつかぶせるように、「——この探偵社はモグリだって言いふらしてやるわ。私はとても顔が広いの。お宅の仕事にも、多少、影響があるんじゃないかしらね」

と言って、唇の端で、ちょっと笑った。

「あなたが言葉だけじゃない男だってことを祈るわ」

クルリと振り向き、応接室のドアを派手に音を立てて開け放つと、足音も高く、出て行った。

お茶をのせた盆を手に、この探偵事務所、唯一の女子事務員、坂下浩子さかしたひろこが顔を出したが、

「あら、もうお帰りになったんですか？」

「ああ。——お茶は二杯とも俺おれが飲む」

と平本は営業用の愛想の良さから、社内向けの仏頂面に表情を切り換えて、言った。

「はい」

と、坂下浩子が出したお茶を一口飲んで、

「——おい、辻山つじやまの奴やつから電話はないのか」
と平本は言った。

「ええ、昨日から全然」

「あいつ！ 何をやっとなんだ！」

平本はかみつきそうな顔で言った。

「さあ」

坂下浩子を知っているわけではない。——平本はぐいとお茶を飲み干した。

「うすいな。これでもお茶か？」

「社長が茶っぱを節約しろとおっしゃったんですよ」

「そうだったかな……」

と、平本は咳せき払いした。

「あ？ お客様らしいですね」

受付でチーンとベルの鳴るのが聞こえて、坂下浩子が出て行こうとした。

「おい、坂下君！」

と、平本は呼び止めて、「ちようどいい。客なら、このお茶をそのまま出そう」

受付へと急ぎながら、坂下浩子は、早く次の勤め先を見付けておかなくちゃ、と考えていた。

「いらっしやいませ」

と、いつもの笑顔に戻る。

「お仕事をお願いしたいんですけどね」

いかにも上品な和服姿の婦人だった。坂下浩子は、お茶を淹れかえよう、と思った……。

「——すると仕事というのは、お嬢さんのボディガードですか」

と平本は言った。

この客は逃せないぞ、と内心、考えていた。金がある人間の顔をしている。

「私の娘ではありません。私がもう三十年近く住み込ませていただいているお宅のお嬢様です」

何だ、家政婦か、と平本は内心がっかりした。

「四日間、お嬢様がアメリカに発たれるまで、護衛していただきたいのです」

「何かその……狙われるような理由でもあるんですか」

「いいえ！ もちろん、お嬢様にもしものことがあるようなときは、守っていただかなくてはなりません、むしろ、どちらかというと、お嬢様がとんでもないことをしでかす可能性の方が強いのです」

「ははあ」

「いわばお目付役、兼ボディガードというところでしょうか」

「それはなかなか難しい仕事ですね」

「承知しております。料金はいくらかかって構いません」

平本は相手をちょっと見直した。

「すると——ずっとそのお嬢さんのそばについていろとおっしゃるんですね？」